



起伏に富んだ広大な放牧地で、育つ北大短角牛

・ 静内研究牧場で飼養されている肉用牛はすべて、日本短角種。放牧に適した品種で、草やサイレージ（草などを乳酸発酵させた飼料）だけでも肥育しやすい特徴があります。



・ ウシの糞尿は草地や飼料畑の肥料に。牧場外部から持ち込む化学肥料や購入飼料を極力少なくした物質循環を第一に考え、ウシの健康にも配慮した持続可能な家畜生産システムを目指しています。穀物飼料には、北海道産の規格外小麦やフスマ（小麦粉の加工残渣）で賄っており、正真正銘の純北海道産牛といえます。

・ 静内研究牧場は、330haの森林を含む470haという広大な敷地を有しており、百頭の北海道和種馬と150頭の肉用牛を飼育。1950（S25）年に農林省から土地と馬の所管換えを受けて発足し、1963（S38）年の敷地拡大を機に肉用牛を導入し、放牧したウシの蹄を利用した「蹄耕法」により造成されました。

ウシ本来のあり方で育った赤身の牛肉

・ 北大短角牛は、赤身でしっかりとした歯ごたえがあり、噛むほどに濃厚なうま味が口に広がります。

・ ヒトが直接食べられる穀物はヒトが食べ、ヒトが食べても養分になりにくい草を、ウシが食べることで肉や乳に変えてもらう。ウシ本来のあり方で育った牛肉の価値を、ぜひ考えてみてください。

北大短角牛はWebでも購入できます。

わかテーブル

<https://table.wacca.life/>

